名所長のお働きと隣国の学究に感謝して

大西　晴樹

橋本茂先生は２００９年３月をもってめでたく定年退職を迎えられます。大学紛争期に結成され、学生の立場にたって行動された明治学院大学若手教員懇談会、いわゆる「ワカコン」最後の現役教員である先生が学院を去られることに一時代の終焉を感ぜざるを得ません。

橋本先生は長い間キリスト教研究所の所長をお勤めになられました。キリスト研究所に対する橋本先生の貢献は 2 つあります。一つは、協力研究員制度の導入です。キリスト教研究所は、1980 年代の前半に、所員資格をキリスト教学担当者以外の教員にもオープンにしました。それにより大学付属研究所として活力を得るようになったのです。橋本所長はさらに協力研究員制度を設け、学外者にまで研究活動のパートナーを求めました。専任教員は所属学部での本務があり、ややもすればキリスト教研究所での活動を等閑にしがちです。共同研究者として学外者を迎え入れることによって、キリスト教研究所の活動に新鮮な知的刺激が加えられ、研究所のパワーアップにつながりました。もう一つの貢献は、キリスト教研究所提供講義科目「明治学院研究」立ち上げです。研究所は研究だけしていればいいのか。その成果を学生に還元しなくてはならないのではないか。この議論が展開されたのはここ１０年来のことです。数年前から明治学院科目にキリ研は「明治学院研究」という講義科目を提供するようになりました。この科目の立ち上げは、橋本先生が所長で、私が主任の時に行われました。私たちは、入学しても明治学院を知らない学生が多いので、その状態をなんとかしようとのことで、ヘボンからはじまって、戦後まで毎回リレー形式で所員と研究員が提供する半期科目を設けたのです。実施は遠藤主任に委ねられました。立ち上げにさいして、すでに「関西学院学」という科目を実施している関西学院大学の神田建次教授をお招きして話を聞きました。神田教授はなんと橋本ゼミの卒業生とのこと。即刻「明治学院研究」の導入を決意しました。

「アイディアマン」所長である橋本先生におかれては、今後とも明治学院大学を見守っていただけたらと願っています。佐藤可士和氏の弁によれば、明治学院大学のロゴマークで使われている黄色はチャペルの窓の黄色い十字架に由来するとのことです。紛争期にバラバラに入っていた黄色いガラスをあのように十字架の形に並べ変えたのが橋本茂先生だということを知る人は少ないようです。

また昨年の 4 月に韓国延世大学神学部からお招きした徐正敏招聘教授も教養教育センターでの 1 年間のお働きを終えて、帰国されます。高名な教会史家であり、同志社大学での留学経験があり日本語も堪能な徐先生は、短い期間でしたが、私たちに、多くのことを教えてくださいました。なかでも徐先生と『白金通信』紙上で対談し、明治学院の韓国人留学生の母国での活躍は多大なものであったことを知ることができました。

これまで金東仁（キム・ドンイン）、李光洙（イ・ガンス）、朱燿翰（チュ・ヨハン）といった 3 人の近代文学者の名前ぐらいしか知らなかったのですが、李光洙と一緒に 1919 年 2 月に神田のＹ

ＭＣＡで三・一独立宣言の引き金となった東京留学生独立宣言を書いたのは、李光洙同様明治学院から早稲田大学に進んだ白南薫（ペ・ナグン）であったこと。独立運動をさらに遡れば、1884年の甲申事変により亡命してきた金玉均（キム・ギョクキュン）、朴泳孝（パク・ヨンヒョ）、徐戴弼（ソ・ジェビル）、徐光範（ソ・クァンボム）のうち、太極旗を考案し、内務大臣を務めた朴泳孝は、明治学院に入学していたこと。他にも、中国で活躍した民族史学者文一平（ブン・イルピョン）、民主化運動を指導した国会議員金相敦（キム・サンドン）。教会関係では、内村鑑三の弟子で韓国福音教会の設立者崔泰瑢（チョ・テイヨン）、延世大学神学部初代教授池東植（チ・ドンシン）、韓国クリスチャンアカデミー元総裁で、明治学院創立120周年で講演し、一昨年天に召された姜元龍（カン・ウォン・ニョン）らが明治学院に留学していたとのこと。

隣国の近代史を織りなす錚々たる人物について教えてくださった徐先生には、キリスト教所の協力研究員になっていただいたので、2013年の『明治学院150年史』の刊行までには、これらの留学生の研究が一層進展することを願い、徐正敏先生の帰国後の延世大学での今後の御活躍を心よりお祈りする次第です。

（おおにし・はるき　所員・本学学長）